



No. 50 [平成29年3月21日]  
岡山県総合教育センター  
〒716-1241  
加賀郡吉備中央町吉川7545-11  
TEL(代) (0866) 56-9101  
(特別支援教育部) (0866) 56-9106  
(特別支援教育部相談専用電話)  
TEL (0866) 56-9117  
<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp>

## 開所10周年記念式典・記念講演会が開かれました

2月19日、県内の教育関係者を招いて、開所10周年記念式典を行いました。式典では、竹井県教育長と起塚所長が10周年を振り返り、挨拶を述べました。式の後には、文部科学省初等中等教育局の田村学視学官から「次期学習指導要領の方向性～アクティブ・ラーニングの視点による不断の授業改善～」と題して記念講演が行われました。

当総合教育センターが開所した平成19年は、「特殊教育から特別支援教育への転換」が図られた最初の年でもあり、特別支援教育部の業務は、時代の変化や学校現場のニーズに対応しながら取り組んできた10年でありました。

そして、今後は、次期学習指導要領に向け「社会に開かれた教育課程」に対応すべく、引き続き研究を重ねていきたいと考えています。



## 平成28年度教育研究発表大会

午後からの研究発表大会では、県内外から約140名の先生方が御参加くださり大変ありがとうございました。

### ○特別支援教育部の発表

「通常の学級における特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり  
ーアセスメントシート分析パッケージの活用ー」



今回の発表では、小学校・中学校2校の実践をもとに、この分析パッケージを活用した成果や変容についての報告を行いました。実践された先生からのコメントを聞いて、「次年度活用してみたい」という声も届いています。岡山大学の丹治敬之先生から、アセスメント分析パッケージを活用する上でのポイントについての助言もいただきました。今後ますます活用する学校が増えることを期待しています。



丹治先生の助言

このアセスメントシートを開発して以来、3月1日現在で、県内では、約300件、県外からは約100件の送付依頼や問い合わせがありました。

今後も普及を図ってまいります。



## コラム (つうしん50回記念)

アセスメントシート分析パッケージ開発への想い  
～子供を変えるのではなく、我々の授業の在り方を変えよう！～

アセスメントシートを開発し、発表したのが、平成23年の3月。あれから6年が経とうとしています。アセスメントシートの開発を始めた平成21年は、ちょうど、通常の学級に在籍する発達障害のある子供たちを含んだ一斉授業の在り方に関心が高まっていた頃でした。

通常の学級における授業は、学年という枠組みごとに学習内容が規定されているため、子供の認知等に困難があっても、原則として、当該学年の学習内容を学ぶこととなります。つまり、通常の学級では、学習内容を量的に軽減することによって、子供たちを援助するには限界があると言えました。

そこで、通常の学級において授業を考えるに当たっては、学習内容を量的に軽減するという視点ではなく、指導・支援方法に着目し、それを子供たちが学びやすいものに工夫するという視点が必要だと考えたのです。そのためには、教師が、一人一人の子供の学び方の特徴や学級集団としての傾向を把握する必要があります。当センターでは、その学び方の特徴・傾向を把握するための実態把握ツールとして、アセスメントシートを開発したのです。

アセスメントシートは、発表以来、何度か改訂を加えながら、昨年2月に「アセスメントシート分析パッケージ」として発表したわけですが、開発当初からのコンセプトは全く変わっていません。それは、「子供を変えるのではなく、我々の授業の在り方を変えよう」ということです。今後も、子供たちの「分かった」「できた」を支えるための一助として、多くの学校に活用されることを願っています。

(特別支援教育部 指導主事)



通常の学級における  
特別支援教育の観点を  
取り入れた授業づくり

— アセスメントシート分析パッケージの活用 —



平成29年2月  
岡山県総合教育センター

## アセスメントシート実施DVD (小学校第1～3学年用)

アセスメントシートを実施する際には音声CDを使用しますが、特に、聴覚的な情報入力に困難さのある低学年の児童には分かりづらい点がありました。

そこで、小学校第1～3学年用の「アセスメントシート実施DVD」を作成し、学級の実態に合わせて、音声CDか実施DVDかを選択して使用できるようにしました。



ブックレットのダウンロードはこちら

<http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/chousa/kiyou/h28/>

## 成果検証 「新任特別支援教育コーディネーター研修講座」

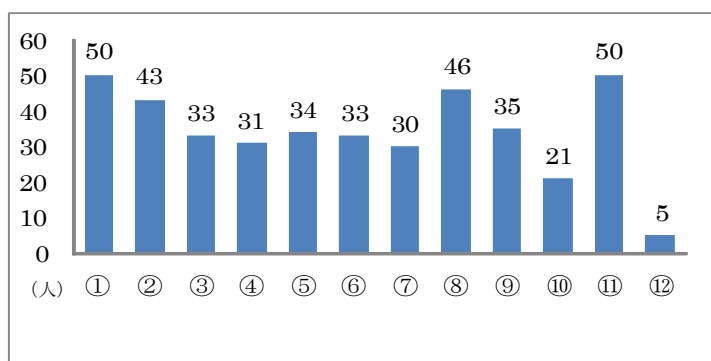
本通信49号でも紹介しましたが、今年度は研修講座の成果を検証するため、12月にアンケート調査を行いました。協力いただいた学校の先生方、ありがとうございました。アンケート結果の概要について紹介します。

質問1 研修した内容の活用状況 ※回答数（77/100人）

- 1：すでに活用している 61人  
 2：活用の仕方を考えているところである 15人  
 3：活用できていない 1人

質問2 どのように活用したか（質問1で「1」と回答した人のみ）（複数回答可）

研修後の活用状況



- |                   |              |              |
|-------------------|--------------|--------------|
| ①個別の教育支援計画の作成等の促し | ②校内委員会の連絡調整  | ③担任の相談・助言    |
| ④校内研修の企画・運営       | ⑤保護者の相談      | ⑥担任とともに保護者支援 |
| ⑦関係機関との連絡調整       | ⑧対象児童生徒の情報収集 | ⑨学校間連携の連絡調整  |
| ⑩専門家チーム、巡回相談の連絡調整 | ⑪力量アップ       | ⑫その他         |

さて、電話相談や教育相談を行っている際、保護者の方から時に次のようなことを伺うことがあります。

「コーディネーターって、うちの学校にもおられるんですか？」

「コーディネーターさんに相談してもいいんですか？」

そもそも、特別支援教育コーディネーターにはどんな役割があるのでしょうか。

特別支援教育コーディネーターとは、各学校における特別支援教育推進のために、主に、次の役割を担う教員です。

- ・特別支援教育に係る校内委員会、校内研修の企画・運営
- ・関係諸機関・学校との連絡・調整
- ・保護者からの相談窓口

「特別支援教育の推進について（通知）19文科初第125号 平成19年4月1日」

県内の学校には、現在、コーディネーターが配置されています。校長が指名し、校務分掌に位置付けられているものです。しかし、実際の取組は、学校で様々であり、時にはその存在が保護者に知らされていないこともあるようです。年度初めのPTA総会や4月の学校便り等で、コーディネーターが誰か、具体的にどんな仕事をするのかを明確に保護者に伝える必要があります。

そして、この時期には、1年間のコーディネーターの取組をまとめ、次年度に引き継いでいきたいと思います。

## うまくいったときこそ原因分析し、共有し、次に生かす取組を

特別支援学校の先生から、「Aくんがトイレでおしっこできたんですよ」との知らせがありました。Aくんは重い知的障害があり、1年生の時から紙おむつをして生活していました。担任は、毎日、学校で何度もトイレに誘い自分で排尿できるよう支援を繰り返していましたが、なかなか思うようにいかない日々でした。個別の教育支援計画の目標の一つにも「トイレで排尿できる」と示し、保護者と共有していました。そして、1年が過ぎ、2年が過ぎ、3年も終わりかけた頃のこと、自分で少し前屈みになり、おなかに力を入れて排尿することに成功したのです。



こうして、文章に表すのは実に簡単なことですが、これまでAくんに関わった多くの先生方が、Aくんに寄り添い毎日毎日繰り返してトイレに誘い、向き合うという姿勢がなければ、この日は来なかったと思います。担任は何度も自分の手立てが間違っているのではないかと、もっとうまくいく方法があるのではないかと自問自答をして焦ることもあったでしょう。

ここで、Aくんが自分で排尿するに至った原因は何だったのか、それを分析しておくことはとても大切なことです。私たちは、できない原因を考えることはしても、どの手立てがよかったのか、その要因を振り返ることができているでしょうか。この分析こそ大切にして、関わった先生方で共有し、次に生かしたいところです。

そして、この成功事例で言えることは、手立てや方法も大切ですが、Aくんの心の成長がそこにあったことを忘れてはいけません。日々の学校生活を送ることで、多くの友達との関わりや、下級生ができたことによるお兄さんとしての自覚も芽生えたのかもしれない。見えないところの成長が大きく関与しています。毎日の登校や運動による体力の成長も欠かせません。腹筋がついて下腹に力を入れることができてきたのかもしれない。最初にトイレで成功した時、周囲にいた先生の今までにない喜びと感動を感じ取ったのかもしれない。そして、「Aくん、すごいね。やったね。自分でおしっこできたね」と褒められることでAくんは、「僕、すごいでしょ」と心で伝えてくれたのかもしれない。



このように、特別支援学校には、日々のゆっくりとした粘り強い先生方の取組のドラマが多くあります。子供たちは、どんな障害であれ、自分で〇〇したい、やってみたい、伝えたいという強い思いがあります。そこに、言葉だけでなく心で対話しながら真摯に向き合い、寄り添い、支援を継続してきた先生方の強い思いがあります。

個別の教育支援計画の評価に「トイレで排尿することができました」の記入は、Aくんが一つ自立できたことの証明です。この一文には、多くの人の溢れる思いが込められた成果でもあり喜びでもあるのです。

次期学習指導要領では、特別支援学校の教育課程について、「社会に開かれた教育課程」の考え方や資質・能力に基づく目標や内容を再整理していくことが打ち出されています。また、在籍する児童生徒の障害の状態や多様化に対応して、知的障害のある児童生徒のための、各教科、自立活動、重複障害者等に対する教育課程の取扱いについても、改善・充実を図る方向性が明らかになっています。

次年度、特別支援教育部では、「次期学習指導要領における教育課程の総合的な研究」と題して研究を進めてまいります。アンケート等で、各市町村教育委員会を始め、各学校等に御協力いただくこともあろうかと思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。